
仮面ライダーディケイド NOVEL大戦SHORT ~ ALKAISER SAGA ~

タトバステイツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド NOVEL大戦SHORT 〈ALK
AISER SAGA〉

【Nコード】

N9221R

【作者名】

タトバステイツ

【あらすじ】

ディケイドの他作品クロス短編集。

第一弾はスクウェアエニックスのRPG『サガフロンティア』に登場するヒーロー「アルカイザー」が活躍する世界。

世界の破壊者ディケイド、アルカイザーの世界でその瞳は何を見る？

3 / 26 タイトルに原作表記を追加

(前書き)

この作品は、以前公開していた「EXTENDED WORLDS」の
一エピソードの再公開となります。

変更点は伏線の削除ですので大筋の変更はありません。

それではディケイドとサガフロのクロスをお楽しみください。

9 / 29 文章を修正。

「あれ、ここ日本なのかな？」

新たな世界にたどり着いた門矢士たち^{かどやつかさ}。

彼らの生活拠点である光写真館の背景ロールには、黄色いスーツを着た戦闘員たちに立ち回るオレンジ色のヒーローの姿が描かれている。それに記されたこの世界の真実を調べるために彼らは外出した。

だが、周りは日本に似た光景であった。そのことで、小野寺ユウスケ^{おののてらゆうすけ}が一言発する。

「でも標識の文字とか、見慣れないものを使っていますよ」

光夏海^{ひかりなつみ}が標識に目を向ける。そこに書かれた文字は、明らかに日本語ではなかった。

「この世界は日本のようで日本じゃない世界だな。とにかくもう少し調べてみよう」

士たちは公園に出た。そこでは幼児たちが無邪気に遊んでいた。

「まずはあの子供たちから聞いてみよう」

ユウスケは幼児の一人に近づき、この世界について尋ねてみた。

「ここはシュライクっていうところだよ。それよりも済王陵の入口を知りたくない？」

「シュライク？済王陵？なんだそりゃ」

ユウスケは聞きなれない言葉に耳を疑った。その様子に、幼児は親切に教えてくれる。

「教えてあげるよ。シュライクつてのはボクたちの住む世界。最近ブラッククロスつてのが悪さしてるんだけど、サントアリオのヒーローがボクたちを護ってくれるんだ。それで済王陵つてのは……」
「それを知りたいのはおれたちだ！」

すると、緑色の全身タイツを来た謎の男が5人ほど現れた。顔面には黒いラインがX状に入っていた。

「ブ、ブラッククロスだあ！！」

彼らはブラッククロスの戦闘員である。その光景を見た公園で遊んでいた子供たちは一目散に逃げ出した。戦闘員たちは士たち三人を包囲する。

「キー！」

「キー！」

戦闘員たちは奇怪な声を上げ、士たちの周囲を徘徊する。

「こいつら、どうやらおれたちを襲うつもりらしいぞ」
「そうらしいな。だが相手が悪かったことを教えてやる」

士はカードからデイケイドのカードを取り出し、バツクル「デイケイドライバー」のスロットに差し込む。

「変身！」

【KAMEN RIDER DECADE】

士は仮面ライダーディケイドに変身すると同時にブラッククロスの戦闘員に攻撃を仕掛ける。

ディケイドは飛び出すと同時にパンチを戦闘員の顔面に見舞う。顔面が変形し、そのまま吹き飛ぶ戦闘員。さらにディケイドはバックスピンキックを別の戦闘員に放ち、昏倒させる。

「キキーツー!!」

戦闘員は二人同時に飛び蹴りを仕掛ける。だが、ディケイドはアタックライドのカードをセットしていた。

【ATTACK RIDER BLAST】

ディケイドはライドブッカーをガンモードにして戦闘員たちを迎撃する。空中に浮いた戦闘員に命中し、戦闘員は撃墜される。

【KAMEN RIDER DEN-O】

ディケイドはカメンライドのカードの効果で仮面ライダー電王に変身する。ライドブッカーをソードモードに変形させ、的確に残った戦闘員を薙ぎ払っていく。さらに腹部目掛けて戦闘員の一人をキックで叩き飛ばし、奥で悶々としながらも立ち上がった戦闘員4人をボウリングのピンのように転倒させる。

「とどめだー!」

【FINAL ATTACK RIDER De・De・De・DE】

ディケイドはファイナルアタックライドを発動し、ライドブッカーにエネルギーを蓄積する。そして、電王の必殺技『エクストリームスラッシュ』で戦闘員の集団をまとめてなぎ払い、全員とも爆死した。

「こんなところか」

ディケイドが電王のまま爆炎の中から出てくると、今度は別の気配を感じた。

「あ、あいつは……」

ユウスケが気配の元の存在を凝視する。それはスフィックスの姿をしていた。

「今度は何だ」

元の姿に戻ったディケイドに、スフィックスのような存在が言葉を発する。

「おれ様はブラッククロスの怪人・スフィックス。戦闘員を軒並み倒したお手並みは流石と言っておこう。だが、ここまでだ！」

「そうかい。お前も同じように倒してやるよ！」

「現れたな、ブラッククロスめ！」

ディケイドが構えた時、また別の戦士が割り込んだ。その戦士はオレンジ色の身体をしている。

「私は正義の使者・アルカイザー！ お前の思い通りにはさせんぞ
！！！」

その姿は、写真館の背景ロールの絵に描かれていたものと同じであつた。それを見た士は心の中でつぶやく。

（こいつは写真館の絵と同じ姿……つまりここはアルカイザーの世界か）

仮面ライダーディケイド NOVEL大戦SHORT

（ALKAISSER SAGA）

<原作：サガ・フロンティア レッド編>

「ほう、現れおつたなアルカイザー！ 今日こそお前の最期にしてやる」

スフィックスは言うが早く、翼で風を巻き起こした。それはとてもない突風となつてアルカイザーに襲いかかる。

だがアルカイザーは高くジャンプしてかわし、逆に間合いを詰めた。

「ブライトナックル！」

アルカイザーは右の拳をスフィックスに見舞つた。拳は当たると同時にストロボのように強い光を放つ。

「ぐわあああ！」

スフィンクスは後ずさりする。だがアルカイザーは間髪いれず、光の剣を生成して斬撃を見舞う。

「レイブレード！」

アルカイザーはスフィンクスに3発ほど斬撃を叩きこむ。その威力に苦悶の表情を浮かべるスフィンクス。

「なかなかやるな、アルカイザー。だが、これならどうかな？」

スフィンクスは強く念じると、スフィンクスとアルカイザー、デイクイドの周りに黒い霧が噴き出した。その霧は、たちまちあたり全体を黒一色に染める。

「ここは不思議空間トワイライトゾーン。怪人たちの能力はここでは3倍になるのだ！」

スフィンクスは自身の力が強まるのを感じていた。

「それがどうした！！！」

アルカイザーは問題にもせず光弾を3発とも放つ。スフィンクスはパワーアップしたその能力で1発をかわすも残りの2発を喰らってしまう。

「ば、馬鹿な……」

その威力の高さに驚き、後ずさりするスフィンクス。一方のアル

カイザーはその様子をチャンスと見ていた。

「とどめだ！ 必殺……・アル・フェニックス！！」

アルカイザーは叫ぶと同時に身体がエネルギーに包まれ、スフィックス目がけて飛び上がって行った。

土の目にはアルカイザーの身体を巡るエネルギーがあたかも彗星のように見えた。アルカイザーはそのままスフィックスに体当たりする。

「ブ、ブラツククロス様……お許しを！」

スフィックスはそのまま断末魔を上げ、爆発した。それと同時にトワイライトゾーンも解除され、元の風景に戻った。

「土！」

「土君、無事ですか！？」

心配していたユウスケと夏海が駆け寄ってくる。ディケイドは大丈夫だと答え、二人を安堵させる。

だが、アルカイザーはディケイドの方を向き、身構えた。

「てめえがディケイドか！ おれたちの世界を破壊するためにやってきたんだな！」

アルカイザーはディケイドに対し敵意を向ける。だが土にとって異世界に初めてたどり着いた時にはほぼ必ず聞く言葉だったので慣れていて。

「またそれか……とにかく話を聞け」

「問答無用！ てめえをブツ潰してやるぜ！！」

アルカイザーは飛びかかり、デイケイドにパンチを見舞う。デイケイドは間一髪でかわし、逆にパンチをアルカイザーに叩きこむ。互いに手足を駆使した肉弾戦が続いたが、デイケイドがライドブツカーを取りだしたのを見てアルカイザーもレイブレードを起動させ、斬り合いに移行する。一進一退の攻防を続けるデイケイドとアルカイザー。すると、突然何者かが声をかける。

「待てよ、レッド！ デイケイドはおれたちIRPOの一員だ」
「ヒューズ！」

アルカイザーことレッドがヒューズと呼んだ男は、この世界の警察組織であるIRPOの隊員でレッドとはブラッククロス関連で共同戦線を張ることも多い。

そのヒューズは士をデイケイドという名前の隊員と認識しているようだ。

「だけどよ、ベージュのコートを着た眼鏡のおっさんが現れてさ、デイケイドは世界を破壊する悪魔だって言ってたんだぜ」

レッドの言葉に反応して、ヒューズは変身を解除した士の肩に手を置いて言葉を返した。

「お前さ、寝ぼけてたんじゃねーの？ とにかくデイケイドはおれたちの仲間だ」

「あんた、仲間っていったいどういうことだ」

士は疑問を言葉にしたが、ヒューズはさらっとした表情で言った。

「なに、うちの隊員データベースに載ってるんだ。そうなってる以上はIRPOの隊員なんだ」

「わかったよ、ヒューズ。あんたがそう言うなら間違いない」

ヒューズの発言にレッドは彼を信じて変身を解除し、正体の赤い服を着た青年の姿を現した。

「なあレッド、今日は親友のレンの結婚式だろ？さっさと行かないと始まつちまうぜ」

その日はレッドの親友レンが結婚式を挙げる日であった。レッドは親友の晴れ舞台ということで楽しみにしていた。

「ああ、そうだった。教えてくれてありがとよ、ヒューズ」

レッドは勢いをつけて走って行った。その後姿を見送るヒューズに土たちは近づく。

「なあヒューズ、ブラッククロスっていったい何なんだ？」

土の問いにヒューズは気取りながらも答える。

「ブラッククロスってのは薬物の違法取引や人間の誘拐に手を染める犯罪組織さ。他にも奴らは何体もの怪人を率いてる。そんな奴らの撲滅を目指すのがおれたちIRPOやヒーローたちさ」

「それで、レッドって人もヒーローの一人ですか？」

今度は夏海がヒューズに問う。

「まあな。あいつは家族を殺されてな、復讐のためにヒーローの力

を得たんだ。それで今はサントアリオのヒーロー・アルカイザーとして闘ってるわけさ」

「それじゃあ、アルカイザー以外にもヒーローがいるってことですね？」

「ああ、おれが知ってる範囲じゃ、アルカールってヒーローがいる。レッドの先輩ヒーローってとこさ」

「大体わかった。つまりこの世界もライダーの存在する世界じゃないってことか。ここもおれの世界じゃないな……」

士はまんざらな表情でぼやきつつも、あたりの写真を撮っていた。

「それじゃあディケイド、そろそろIRPO本部に戻るぜ」

突然のヒューズという言葉に戸惑う士。ヒューズはブラッククロスでの作戦会議があると言った。

「どうやらおれの役割はIRPO隊員のような。お前たちはもう少しこの世界のことを調べてくれ」

士はヒューズについて行った。途中で気になる風景を写真に収めつつも。

「頑張れよ、士！」

ユウスケと夏海は二人をただ見送っていた。

結婚式会場の教会では、レンと新婦エミリアの結婚式をレッドは見届けていた。

赤いカーペットの上を並んで歩くレンとエミリア。神父の前にたどり着くと、レンとエミリアはそれぞれ誓いの言葉を交わし、キスをした。

会場から湧きあがる拍手。無論親友であるレッドも拍手していた。結婚式が終わった後、レッドは祝福するためにレンとエミリアに近づいた。

「レン、これでお前も家族持ちか。羨ましいなー」
「まあスケベなお前には女運なんてないだろうけどな」

レッドは何だと、と言り返す。無論友人の冗談であることはレッドにはわかっていた。

「まあまあ、そんなこと言わないで。レッド、あなたもきつというか素敵な人に巡り合えるわよ」

エミリアが微笑みながらレッドを励ます。

「とにかく、お前たちが幸せでおれ嬉しいよ。これからも幸せに暮らせよ、二人共」

レッドは改めて結ばれた二人を祝う。彼は親友の幸福な姿が心から嬉しかったのである。

「ああ、勿論さ。ところでレッド、これからもアルカイザーとして闘い続けるんだろ？」

レンは話題を変える。彼としてもヒーローとして闘い続けるレッドを心配していた。

「当然だ。あいつらはおれの家族の仇だからな」

「まだ家族を殺されたことを引きずっているのか……？」

「そうさ、ブラッククロスの奴らをぶっ潰す！ ……それがおれの生きがいなんだ」

レンとエミリアの目にはブラッククロスへの怒りに燃えるレッドの姿が映っていた。

「そうか、おれとしては今は頑張れとしか言えない。こんなことしかできないおれを許してくれ」

「いいんだよ、レン。頑張れと言ってくれるだけでおれは十分さ」

心配なレンを安心させるようにレッドは右手をレンの肩に置く。

「レッド、くれぐれも身体には気をつけてね」

エミリアもレッドを案ずる声をかける。彼女としても夫の親友である彼を失いたくはなかった。

「それよりも次は披露宴だろ？ あんまり待たせるのも悪いぜ」

レッドは自身を案ずる二人を披露宴の準備をするよう急かした。

二人は頷いて、更衣室へと向かった。

IRPOの本部にて、土は会議室の中にいた。

出席しているのはヒューズ以外にはドール、サイレンス、ラビットがいた。

真つ先にドールが現況を報告する。

「アラクーネは私とサイレンスが倒したわ。これで残りの四天王は3人ね」

ブラッククロスには4人の幹部がおり彼らは四天王と呼ばれている。改造人間シュウザー、獣人ベルヴァ、妖魔アラクーネ、ロボットのメタルブラックから構成されており、そのうちのアラクーネはドールとサイレンスによって撃破された。

ドールは人間の女性隊員で、冷めた性格からアイシールドの異名を持つ。かつては妖魔界ファシナトールで暮らしていたという噂があり、そのためか妖術と呼ばれる魔法を扱うことが出来る。

サイレンスは人間に似た妖魔という種族の隊員で、IRPOで妖魔であるのは彼のみである。本名は不明で、コードネームの通り一言も話さない。彼はフェンシング系の剣技を得意としておりその腕はIRPO内でも右に出る者はいない。

「現在、四天王の一人シュウザーがシュライクに来ているとの情報を得ました」

ラビットはメカの隊員のうちの一機で、情報収集能力に長けている。その能力を生かし、シュライク内のネットワークを使って四天王シュウザーの情報をいち早くつかんでいたのである。

(ドールにサイレンスにラビットか、なかなか面白い場所だ)

士は一言も話さずに会議の内容を聞いていた。シュウザーに関する議題になり、士はドールから意見を求められた。

「デイケイド、あなたの意見は？」

「四天王の一人がいるのは事実だ。何か企んでいるんだろう、居場所を突き止めて叩くべきだ」

「だが潜伏情報を得たとはいえ、居場所は全然わからないんだぜ？」

ヒューズが言葉を発する。それに対しラビットが意見する。

「いえ、潜伏したという情報が分かっている以上私に搭載されている高性能センサーを使えばシュウザーの居場所を突き止められます」「ラビットならすぐに居場所を突き止められるだろう。見つけたら速攻で叩けばいい」

議論は賛成か反対かの意見になり、賛成の多数決によりシュウザー殲滅作戦が開始された。

披露宴が終わったその夜、レッドはレン・エミリアと同じホテルに泊まることになった。披露宴あたりで何らかの胸騒ぎを感じ、彼らの護衛をしたほうがいいと判断したためである。

「あいつら、早速イチャイチャしてんだらうな」

レンとエミリアが入っている隣の部屋にて、レッドはベッドの上であぐらをかいていた。

それから数刻が経つと、突然レンの部屋から騒々しい音が聞こえてきた。

「きゃああっ！！」

さらにエミリアの甲高い悲鳴が続けさまに流れてくる。その様子

にレッドはただならぬ事態であることを悟った。

「エミリア！ どうした！！！」

レンの部屋のドアはエミリアが鍵を外したらしく簡単に開いた。そこでレッドが目にした光景は、目前に尻をついてへたり込むエミリアとレンの無残な死体、そして見覚えのある男であった。

「お前は、シュウザー！！！」

レッドの目の前にいたのは、ブラッククロスの四天王の一人であるシュウザーであった。シュウザーはレッドの家族を殺した張本人であり、彼にとって倒すべき仇であった。レンを殺害したシュウザーは割れたガラス窓から素早く逃げだした。

「ま、待て！！！」

レッドはすかさず窓から飛び出し、シュウザーの行方を追う。部屋は15階の高さにあり、レッドはそのまま地上へ向かってダイブしていった。

「変身！！！」

衝撃に耐えるため、レッドは空中で腕時計型の変身ツールを使いアルカイザーに変身する。そのままアスファルト上に着地すると、遁走するシュウザーを確認し自らも走って追跡する。

「おれの家族に加えてレンも！ 絶対に許さんぞ！！！」

逃げるシュウザーを必死に追うアルカイザー。ふとシュウザーの

動きが止まった。アルカイザーも止まると目の前にはIRPOのドールとサイレンス、そして土がいた。

「ほう、こいつがブラッククロスの四天王の一人シュウザーか」

土は視界に入る男を前に言葉を発した。

「そう、彼がブラッククロス四天王のシュウザー。彼を捕まえるのが私たちの任務、だからくれぐれも勝手なことはいしないで」

ドールは任務に支障が出ないよう、土に忠告した。

「とにかくあいつを倒せばいいんだろ？まあおれの実力を見せてやるわ」

土はお構いなしと言わんばかりにディケイドのカードを取り出し、ディケイドライバーにセットする。

「変身！ー！」

【KAMEN RIDE DECADE】

ベルトの音声と同時に、土の姿は仮面ライダーディケイドに変わる。

「サイレンス、行くわよ」

ドールの言葉にサイレンスは無言でうなずき、ドールと歩調を合わせてシュウザーに立ち向かった。

真つ先にディケイドがライドブッカー・ソードモードでシュウザーに斬りかかる。だがシュウザーは機械化された巨大な腕で平然と受け止める。

「改造人間シュウザーの恐ろしさを思い知らせてやるっ」

今度はシュウザーが腕から三本のクローを出現させ、ディケイドを引き裂く。

「ぐっつー!!」

ダメージを負い、後ずさりするディケイド。その後方からドールが妖術『幻夢の一撃』を発動させる。亜空間が発生し、猫の姿を象った妖術のエネルギー体が現れる。そのエネルギーはシュウザー目にかけて体当たりし、大きな波動となってシュウザーを包みこんだ。

「小賢しい真似を!」

シュウザーは気合でエネルギーを振り払う。その隙にサイレンスがレイピアを手に突撃する。

「……………」

サイレンスは素早く突きを繰り出す。レイピアの鋭い刃が突き刺さり、シュウザーは少なからずダメージを受けた。それでもシュウザーは巨大な金属の腕を振り回すが、サイレンスはとんぼ返りでこれを避け、さらに背後からレイピアを突く。

「おのれ……………ならばとっておきの技を見せてやる!」

シュウザーは機械の腕を切り離す。すると腕の接続部からバーニアが噴射し、IRPO目がけてクローを突き出した腕「クロービット」を飛ばす。クロービットはディケイドとIRPOのメンバーを引き裂いた。

「シュウザー！ 貴様の相手はこの私だ！！」

後方からアルカイザーがIRPOの窮地を救うべくシュウザーに挑む。

「アル・ブラスター！！」

アルカイザーは2発の光弾をクロービット目がけて放つ。光弾は2発とも命中し、クロービットを地面にたたき落とす。

「くっ、アルカイザーめ！！」

シュウザーは念じてクロービットを自身の二の腕に接続させる。アルカイザーはレイブレードを起動してシュウザーに斬りかかる。アルカイザーの光の剣が機械の腕で受け止められ、シュウザーのクローをアルカイザーが打ち払う一進一退の攻防が続いた。その様子を見て、大ダメージを受けながらも立ち上がったディケイドがライドブッカーからカメンライドのカードを取り出す。

「この野郎、手こずらせやがって！」

【KAMEN RIDER FAIZ】

カメンライドのカードによりディケイドの姿は仮面ライダーファイズに変わった。続けさまにフォームライドのカードを取り出しデ

イケイドライバーに挿入する。

【FORM RIDE FAIZ AXEL】

デイクイドの姿はさらにファイズ・アクセルフォームに変化する。間髪いれずデイクイドは腕のスイッチのボタンを押す。

【START UP】

これによりファイズ・アクセルフォームは10秒間だけ1000倍の速度で行動できるようになる。その効果でデイクイドはアルカイザーとシュウザーの闘いに割り込み、シュウザーに目にもとまらぬ打撃を連続して加えていく。

「こ、これがデイクイドなのか……」

超高速でシュウザーに攻撃を加えるデイクイドを見て、アルカイザーは啞然としていた。10秒が経過し、デイクイドは元の姿に戻りシュウザーはその多大なダメージにうずくまる。

突如、上空からヘリコプターの音が聞こえてきた。そのヘリコプターから梯子が下りると、シュウザーは高く飛びあがって梯子をつかんだ。

「覚えておけ、次会った時には貴様らに明日はないぞ!!」

「ま、待て!!」

アルカイザーの叫びもむなしく、シュウザーは空の彼方へ消えていった。

現場にヒューズが遅れて駆けつけてきた。

「お前ら、ひどい怪我だが一体どうした!？」

ドールやサイレンスの怪我を負った姿を見てヒューズが一言発する。

「すまん、シュウザーを逃がした」

ディケイドの変身を解いた士がヒューズに近づき、状況を報告した。

「そうか……アラクーネを倒したドールやサイレンスがこのザマだから、シュウザーは相当な強敵だな」

今ある状況を見て、ヒューズは自身がまだ見ぬ敵を推測していた。そこにアルカイザーの変身を解いたレッドが近づく。

「ヒューズ! 奴はレンを殺しやがった!！」

「何だと!!？」

レッドの言葉に驚愕するヒューズ。盟友の家族と親友を殺害し、犠牲者を増やし続けるシュウザーに彼も怒りを新たにした。

「くそっ! シュウザーめ!！」

ヒューズは怒りで拳を強く握り空気を切り裂くように空振らせる。レッドもシュウザーに対する怒りで歯ぎしりをしていた。そこに士が声をかける。

「だがこの状況ではシュウザーを追うことはできない。それよりもドールとサイレンスが深手を負っている、病院に運んだほうがいい」

その言葉に怒りで我を忘れていたヒューズが我に返り、頷いて携帯電話で救急車を呼び出した。

翌日の朝、レッドと士はシューザーを追跡すべく合流していた。ユウスケと夏海も彼らに加わっている。ユウスケと夏海は写真館に帰った士から昨日の事情を知らされていた。

「レッドさん、相当張りきってますね」
「仕方ないよ、家族と親友を殺されたんだから」

ユウスケと夏海は復讐に燃えるレッドを直視していた。

「それでレッド、どうやってシューザーを探すつもりなんだ？」

士はレッドに声をかける。それにレッドが反応し、大声を上げる。

「手当たりしだい聞きこむ！」
「馬鹿か、お前は」

レッドの直球な言葉に士はあきれ返った。そこにユウスケも言葉をはさむ。

「シューザーは昨日の件で警戒してこの街にはいないよ。別の街に移ったと考えるのが普通じゃないかな」
「でも、どうやって突き止められるんでしょう」

夏海は疑問を口にする。そこに海東大樹かいたつたいきが現れた。

「シユウザーの居場所なら、ボクが突き止めたよ」
「海東！」

士は海東を睨みつける。今度は何を仕出かすのかわからず、警戒せざるを得なかった。

「君たちも追っているんだろう？ここはひとつ、ボクと手を組まないかい」

「いったいどういう風の吹きまわしだ」

士の言葉に海東は澄ました表情で答える。

「何、共にシユウザーを倒そうって提案してるのさ。そこにいるレツドって人だって仇を取りたいんだろ？彼は多数の部下を引き連れるから人手は多い方がいい」

少し間をおいて、海東は再び口を開いた。

「その代わり、シユウザーが持つてるお宝『キューブ』はボクがいただく。それだけは守ってもらおうよ」

「やはり宝が狙いか」

海東の本心を聞いて、やはりか……と士は思った。海東は行く先々で世界の宝を求めていた。この世界においても彼が何らかの宝を求めることを想像するのは難しくはなかった。

「シユウザーを倒せるってのならそんなもんなどお前にくれてやるよ。さあシユウザーをぶっ倒しに行こうぜ！！」

レッドは海東の提案により一層張り切っていた。海東はその様子を見て交渉成立だね、とつぶやいた。

「まあいいじゃないか、土。今回は海東も協力してくれることだし、仲間は多い方がいいだろ?」

「別に大樹さんが求めているのはわたしたちにとってそんなに重要なものじゃないし、気にしないでいいんじゃないですか」

ユウスケと夏海もそろって発言する。その言葉にさすがの土も吹っ切れた。

「仕方ないか。シユウザーの部下は多い、今回はあいつもおとなしくしそっだし大丈夫だろう」

こうして土たちとレッドに海東を加えたメンバーでシユウザーの基地に乗り込むことになった。

「よし、それじゃあ写真館で作戦会議だ」

土たちは写真館に戻ろうとすると突如謎の人影が3人現れた。

「アルカイザー、シユウザーに親友のレンを殺されたと聞いた。つらいことになったな」

「アルカール……」

目の前にはアルカイザーと同じ姿をした黒い体色のヒーローがいた。他の二人はそれぞれ異なる容姿をしている。

「アルカール、これからおれはレンの仇討ちに行く。シユウザーの野郎をぶっ潰すんだ」

だが、アルカールはレッドの言葉を否定した。

「駄目だ、君には別の任務についてもらう」

「なんでだよ!!」

レッドは突然の命令に疑問を感じたが、アルカールは冷徹にもレッドを諭す。

「君の仇をとりたい気持ちはわかる。だがサントアリオの命令は絶対だ、守れないようなら君はヒーローをやめてもらおう」

「それってどういうことですか？」

夏海はアルカールに疑問を投げかけた。アルカールは彼女の質問に静かに答える。

「所詮ヒーローといっても組織の命令でしか動けない存在だ。警察や軍隊と変わらん。組織に組み込まれている以上は従うしかないのだ。このことは私の力ではどうすることもできん」

「わかったよ、辞めればいいんだろ！何の罪もなく殺された親友の無念を晴らすこともできず、ただ上からの命令でワンと鳴くだけの組織の犬なんてまっぴらだ。アルカイザーの変身ツールはあんたに返すぜ!!」

いきり立ったレッドは腕時計型変身ツールを乱暴に取り外し、アルカールの足元に叩きつけた。それを屈んで手に取るアルカール。

「レッド、それでいいのかよ!!」

ユウスケがレッドに声をかける。だがレッドは拳を強く握りしめて返答した。

「いいんだ。今のおれには仇討ちをすることしか考えられねえ」
「わかった、今日から君を除名処分にする。さらばだ、レッド」

アルカールとその仲間たちはアルカイザーの変身ツールを持ったまま、素早く飛び立った。

「おれは家族を殺され、親友も殺された。シユウザー、奴だけは絶対に許さねえ。それなのに上からの命令に雁字搦めにされて仇討ちもできないのなら、おれはヒーローでなくてもいい」

レッドの言葉には静かな怒りが込められていた。その様子を見て夏海が一言を発する。

「それほどにレッドさんは仇討ちに執念を燃やしているんですね……」
「それよりも今はシユウザーをどうやって叩くかの作戦を立てるべきだろう。早速でも会議をするぞ」

発言者の土を除いた全員がうなずく。彼らは急いで写真館の中へと入っていった。

その様子を影からベージュのコートと帽子と眼鏡をかけた男・鳴滝が見つめていた。

「ライダーの浸食によりアルカイザーが消滅した……。デイケイドめ、お前だけは絶対に許さない……」

鳴滝は一言つぶやくと、さっそうと消えていった。

光写真館に戻った5人は、シューザーを倒すための作戦会議を立てていた。

「今シューザーがいるのはここから10キロくらい離れた廃ビルの中さ。ボクが調べたところではこんなところかな」

海東は澄ました表情で情報を提供し、それを聞いたレッドが口をはさむ。

「そうか、居場所が分かったなら早速突撃しようぜ！」

「それじゃあ作戦会議にならないです」

レッドの単純さに夏海が突っ込みを入れる。

「真正面から乗り込んで八手の巢にされるだけだよ。何とかして潜入できないものかな」

ユウスケの意見を聞いて、土は口を開いた。

「考えられることは2つ、海東がインビジブルで透明化して乗り込むか、または戦闘員に化けるかだな」

ユウスケ、夏海、レッドの3人は頷いた。だが、海東には別の考えがあった。

「ちょっとそれじゃ物足りないかな。確かに変装するのは潜入の基本だ。だけど……」

「だけど？」

「ボクとしてはシユウザーはもつと別の場所に本拠地を構えてると思うんだ。だから潜入メンバーを小野寺君とレッド君の二人にした。要するにボクと土はとっておきの切り札というわけさ」

海東はユウスケとレッドを廃ビルに潜入させシユウザーをわざと逃がして、本当の本拠地を探ってシユウザーをそこで叩く作戦を提案した。

「大体わかった。おれと海東は本当の本拠地の潜入メンバー、そのためにも行動を奴らに悟られないようにするんだな」

海東の意図を理解した土は納得の表情を見せる。

「そういうことさ。ボクと土はシユウザーに取り入って彼の部下になり、内部から組織を崩していく。そうして丸裸になったところをレッド君が叩くといったところかな」

「なるほど！」

レッドが嬉々として反応するが、夏海は一つ疑問を持っていた。

「でも、土君……昨日のシユウザーとの闘いで顔見られてますよね。土君が乗り込んだんじゃないや怪しまれるんじゃないでしょうか……」

「大丈夫さ。彼のこの世界での役割はIRPO隊員。IRPOにも協力してもらって偽の機密情報を作り、それを手土産に乗り込めば簡単に信じてもらえるぞ」

海東は夏海を安心させるように説明する。

「よし、決まりだ。それでは早速シユウザーの基地へと向かおう」

士たちは立ち上がり、絵の飾られている部屋から出ようとした。そこに夏海の祖父・栄次郎が現れる。

「君たち、ちよつと待ちなさい」

「おじいちゃん？」

栄次郎の手には風呂敷に包まれた大きな箱があった。

「君たちのためにお弁当を作ったんだ。持って行きなさい」

「中身は何ですか？」

ユウスケが弁当箱の中身に興味を持ち尋ねる。そこにキバーラが現れて口をはさんだ。

「うふふ……開けてからのお楽しみよ……」

「そうか、ありがたく受け取っておこう」

士は栄次郎から弁当箱を受け取り、他の4人とともにシュウザーのいる廃ビルへと向かっていった。

シュライクの士たちがいる場所から数キロ離れた薄暗いビルの中で、シュウザーは部下と共に捕獲した女性の踊りを楽しんでいた。シュウザーは部下たちに茶色い仮面の怪人を紹介する。

「我らが首領は大シヨツカーと手を組んだ。彼は大シヨツカーの大幹部であるアポロガイストだ。ブラッククロスと大シヨツカーの同盟を祝って、今日は無礼講だ！」

「キキーツー!!」

戦闘員から歓喜の音がわきあがる。酒を飲み、料理を頼張る戦闘員たち。

「シユウザーよ、なかなか面白い宴なのだ。旨い酒に旨い料理、さらに美女の踊りを見れるとならばまさに至れり尽くせりなのだ」

「わが友アポロガイストよ、年代物のワインだ。どんどん飲んでくれ!!」

シユウザーは高笑いしながらアポロガイストと共に酒を酌み交わしている。女性は生き残りたいとの一心でシユウザーを楽しませるために踊り続けていた。その中の緑色の髪の少女にアポロガイストの視線が止まった。

「あの娘、結構な美人ではないか。名前は何と言うのだ?」

「確かアセルスとかいう名前だ。なんか妖魔の国から逃げてきたという噂らしい」

「ほう、アセルスというのか。シユウザー、お前もなかなかのモノを連れてきたものだな。ハッハッハ!!」

シユウザーとアポロガイストは女性たちの踊りを楽しみながらも豪快に酒を飲んでた。それと共に、彼らの話は盛り上がりを見せていた。

「実はおれ様の本拠地はバカラという高層ビルにある」

「ほう、バカラというからにはカジノがあるのだろうか」

アセルスは踊りながらもその会話を耳にしていた。

(バカラ……そこがシュウザーの本拠地……)

彼女は妖魔の国ファシナトウルからやってきた人間である。元はシュライクで暮らしていたが、ファシナトウルの王・オルロワ―ジユに連れ去られ数年をそこで暮らしていた。

彼女はシュライクへ帰る途中、シュウザーの一味に捕まり今はどうしてシュウザーたちを楽しませるために踊らされているのである。ここで、アポロガイストは時計のほうに目をやるとせわしく席を立った。

「シュウザーよ、私はこれから別の仕事があるのだ。今日はここで失礼するのだ」

「そうか。もつと続けたかったがアポロガイストにも用事があるのなら仕方ない。今日はここでお開きとしよう」

シュウザーは宴の終わりを告げ、戦闘員に片づけを命じた。その後踊っていた女性たちの方向に視線を向ける。

「よし、女どもを牢屋につれ戻せ」

「キーツ！」

3人ほどの戦闘員が、女性たちを牢屋まで誘導する。その中には当然アセルスも含まれていた。

(戦闘員は3人ほど……逃げ出すチャンスはここしかない！)

戦闘員に連れ去られながらも、アセルスは内心で脱出することを考えていたのである。

女性たちが去ったところで、アポロガイストがシュウザーに別れの言葉を告げた。

「それではシュウザー、今日の宴は楽しかったのだ」
「まあいつでも来てくれ」

アポロガイストはオーロラを発生させ、その中へと消えていった。アポロガイストが消えると同時に黒いロボットが瞬時に現れる。

「ほう、メタルブラックか」

メタルブラックはブラッククロス四天王の一人で、四天王唯一の完全な機械である。戦国時代の武将のような姿をしており、四天王の中でも正々堂々とした闘いを好む。

「大シヨツカーの幹部と宴会をしていると聞いてな、かけつけてみたらもう終わっていたようだな」

「まあ残念だがアポロガイストが帰ってしまったからな」

メタルブラックは参加できなかったことから話題を変える。

「先日どうやらここにネズミが入りこんだらしい。いずれヒーローなりIRPOなり現れるだろう」

メタルブラックはわずかながらに海東の潜入に気付いており、そのことでシュウザーに警告してきたところであった。

「放っておけ、おれの本拠地はバカラだ。これに気付かれない限りは安心だ」

シュウザーは高笑いした。彼の余裕そうな態度を見てメタルブラックはロボットながらに不安を抱えていたのだった。

「みんな、ここが現在のシユウザーの居場所だよ」

「ここがお前の言っていた場所か」

士たちは海東の案内先の場所へとたどり着いた。海東が指差した先には、ひとつの廃ビルがあった。まだ14時過ぎの昼下がりであるためか、あたりはまだ明るい。

「あそこにシユウザーが……絶対にぶっ潰してやるぜ!!」

レッドは、右手の握り拳を思い切りよくもう片方の手の掌に当て、その拳を握る仕草をした。

「ちょっと、レッドさん。作戦を忘れたんですか？大樹さんの言うとおり本当の本拠地に逃がすという作戦ですよ」

夏海があきれながらもレッドに確認する。

「わかってるよ。そのためにもおれとユウスケがあそこに潜入するんだからな。シユウザーを叩きのめすのはそれからの楽しみってことだぜ」

突然、レッドの腹の音が鳴った。それと同時に空腹感も感じ始めていた。

「……もう昼も過ぎたことだし、じいさんがくれた弁当喰おうぜ」「それもそうだね。でもここだと危ないし、潜入は夜になったほうがいいから別の場所で食べて夜になるのを待とうしよう」

海東の言うとおりに、士たちは廃ビルから離れた場所にある公園へと向かった。

「よし、早速開けようぜ」

夏海の祖父・栄次郎がくれた弁当箱の風呂敷を外し、レッドはふたを開けた。その中身は、白いコウモリを象ったものであった。白い部分は米、大きな赤い眼の部分はケチャップの乗ったハンバーグからなる。その周りにはハートを象った具が何個も飾られている。5重に積み重ねられていた弁当箱は、いずれも同じ内容であった。

「これって、キバーラ……だよな」

ユウスケが弁当箱の中身を一目見てつぶやく。

「キバーラが開けてからのお楽しみと言ってたのはこのことか」

士は面を喰らっていた。文字通り、弁当の中身のデザインに対してである。

「おお、旨い！ 結構イケる！！」

レッドは啞然とする士たちを尻目に弁当を食っていた。米やハンバーグが流れるようにレッドの口に入っていく。

「まあデザインがアレだから不味いつてわけじゃない。お腹がすいてるしボクたちも昼食を済ませようよ」

海東の言葉にレッド以外の3人も頷いて弁当を食べ始めた。

時刻は19時を回り、夜の帳に包まれた廃ビルにて海東が用意した赤いブラッククロス戦闘員のスーツに身を包んだユウスケとレッドが侵入しようとしていた。

「しかし海東も準備がいいなあ、こんなだっさいスーツを奪ってくるなんて」

戦闘員のスーツのデザインに対して、ユウスケはあまり良いと思うことは出来なかった。

「シユウザー、待ってるよ！」

「キー！」

黄色いスーツの戦闘員が二人を見かけるなり奇声を上げる。

「キー！」

ユウスケとレッドも同様の掛け声を発する。ブラッククロスの戦闘員はキーとしか喋ることは許されていない、だから日本語を話すと怪しまれるのだ。それを聞いた戦闘員は入口脇に移動し、彼らを通した。

ユウスケとレッドは薄暗い廃ビルの中を進んでいく。電気は通っているらしく、所々に照明がついていた。彼らが階段を上ろうとした時、ふと、足音が聞こえてきた。その音はせわしく、まるで人が急いでいるようだった。

「誰かが下りてくるぞ」

ユウスケとレッドは恐る恐る階段を上っていく。すると、突如ア

セルスが姿を現した。

「しまった！」

アセルスは二人の姿に、驚きを隠していなかった。

「アセルス姉ちゃん!？」

レッドはアセルスの姿を見るなり、彼女に近づいていく。

「その声、もしかしてレッド君!？」

アセルスはその声からレッドを思いだしていた。アセルスとレッドは幼いころからの知り合いであり、彼女はファシナトウルへ連れ去られて以来レッドと離れ離れになっていたが、レッドがアルカイザーになりたての頃に一度再会している。その時の声を、アセルスは覚えていた。

「そうだよ、おれだよ！」

レッドは戦闘員のマスクを脱いで、素顔を露わした。

「なんでレッド君がこんなところに？」

「おれとそこにいるユウスケは、シュウザーをぶつ倒すためにここに来てるんだ。アセルス姉ちゃんこそなんでここにいるんだ？」

レッドもアセルスがいることに対する疑問を問いかける。

「わたし……オルロワージユを倒して人間に戻って、シュライクに帰ろうとしたんだけどシュウザーに捕まったの」

彼女はファシナトウルへ連れ去られた時、オルロワージユから妖魔の血を与えられて半妖となっていた。そのことはレッドも以前再会した時に知っている。そのオルロワージユはアセルスによって倒されたため、彼女から妖魔の血が消えて元の人間に戻れたのである。

「それで逃げてきたんだな」
「うん」

アセルスが頷いた時、警報が甲高く鳴った。それと同時に戦闘員の奇声と、「女が脱走した」との怪人の声が聞こえてきた。その状況を察したレッドがユウスケに頼む。

「ユウスケ、アセルス姉ちゃんを連れて戻ってきてくれ。おれはシュウザーのところに行つて来る」

レッドはユウスケにアセルスを預け、単身でシュウザーの場所に行こうとした。

「ちょっと待てよ、海東は二人で潜入しろって言ってたんだぞ」
「アセルス姉ちゃんは追われてるんだ、誰かがついてないと連れ戻される確率が高い。それに、おれにはどうしてもシュウザーをぶつ潰したい気分なんだ」

レッドは返答も聞かず、シュウザーのいる部屋へと走って行った。

「待て、レッドー！」

ユウスケの叫びもすでにレッドには届いていなかった。

「あなたがユウスケね。きっとレッドは大丈夫だから、捕まる前にさっさと出よう」

「仕方ないな……アセルス、行こう」

ユウスケとアセルスは出口に向かって走って行った。途中で戦闘員に襲撃されるも生身の徒手空拳でなんとかなるほど弱かった。

「ここが……出口」

二人は出口にでた。先ほどの見張りの戦闘員が襲ってきたが、ユウスケにとっては敵ではなかった。ユウスケはパンチ一発で戦闘員を殴り倒す。しかし、突如メタルブラックが現れる。

「我が名は四天王が一人、メタルブラック。ここで一手お手合わせ願おう」

メタルブラックは、構えると同時にユウスケたちに襲いかかってきた。

「アセルス、下がってて。変身！」

ユウスケは変身ポーズをとると、戦闘員のスーツから瞬時に仮面ライダークウガの姿に変わった。同時にメタルブラックの方向へ走り、パンチを見舞う。メタルブラックはこれをかわし、剣による突きを繰り返す。

「あぶね！」

クウガは間髪でメタルブラックの突きをかわす。間髪いれずク

ウガは超変身の掛け声と同時にタイタンフォームへと姿を変えた。今度はクウガがタイタンソード片手に、メタルブラックに斬撃を繰り出していく。その重い一撃に、メタルブラックも思わず後ずさりする。

「ほう、なかなかやるではないか。だが、これは耐えられるかな？」

メタルブラックは一旦間合いを取ると、瞬時にクウガへと近づいていく。

「喰らえ！ タイガーランページ！！」

「ぐっつ！！」

メタルブラックはクウガ目がけてパンチの連打を繰り出す。その一発は重く、防御力の高いタイタンフォームと言えども少なからずダメージを受け、元のマイティフォームへ戻ってしまう。その様子を見ていたアセルスが、道端に落ちていた鉄パイプを握りメタルブラックに突きを繰り出していく。

「お前はシュウザーに捕まった娘か。闘う術を心得ていたとは意外だな」

「わたしだって、オルロウージュを倒した。だから闘える！」

アセルスは空高く飛び上がると、メタルブラック目がけて鉄パイプの突きを繰り出す。

「神速三段突き！！」

一撃が入るやいなや、アセルスはさらに2発の突きを目にもとまらぬ速さでメタルブラックに見舞っていく。その素早い攻撃に、さ

すがのメタルブラックも反撃の機会を見いだせずにはいた。

「ユウスケ！ 今よ！！！」

「ああ！！！」

アセルスの声に反応して、クウガは必殺技『マイティキック』をメタルブラックに放つ。その一撃にメタルブラックは身体からスパークが発生し、悶絶する。すると、突然オーロラが発生しそこからベージュのコートと眼鏡をかけた男・鳴滝が現れる。

「ユウスケ君、久しぶりだな」

「鳴滝さん！？」

鳴滝はさらにライオトルーパーを2体召喚し、戦闘不能になったメタルブラックを担ぎあげてオーロラの中へと連れさせた。

「鳴滝さん、なぜメタルブラックを！？」

だが、鳴滝は回答せず、ユウスケに警告した。

「ユウスケ君、これ以上ディケイドには関わらな。君自身に破滅をもたらすことになるぞ」

鳴滝はそう言うと颯爽とオーロラへと去って行った。

「鳴滝さんっ！！！」

変身を解除したユウスケは叫んだが、時すでに遅く鳴滝はいなかった。

一方、レッドはシューザーを追って広間にたどり着いた。

「シューザー！ 出てこい！！」

だが、そこにはシューザーどころかすでに人ひとりいなかった。

その時、ヘリコプターの音が聞こえてくる。レッドは即座に窓ガラスに張り付き目を凝らす。そこにはヘリコプターが飛び立つ光景があり、窓にはシューザーの顔があった。

「まさか、逃げる気か！！」

ビルを飛び立ったヘリコプターは、瞬時に遠ざかっていった。レッドはシューザーを叩きのめせなかった悔しさから力任せに拳で空を切った。

「土君、レッドですよ！！」

夏海が廃ビルから出てくるレッドを指差す。

「どうやら無事に戻ってきたらしいな」

土もレッドの姿を確認する。レッドは戻るとすぐにシューザーを逃がした事を告げるも、未だに悔しがる様子を見せていた。その彼に海東が声をかける。

「御苦労さま。でも心配は」無用さ

「それってどういことだ？」

海東の発言を聞いたレッドが疑問を投げかけたが、そこに一足先に脱出したアセルスが現れる。

「わたし、偶然シユウザーの本拠地の場所を知ったの。だからそこへ行けば必ず会えると思う」

「つまりアセルスが情報提供してくれたから、シユウザーに会いに行ったところで無駄になってたってわけさ」

「なんだよ、そういうことか。よし、今度こそぶっ潰してやるぜ
！！」

海東の言葉にもレッドは前向きにとらえていた。そんな真っ直ぐな単純さも、また彼の長所かもしれないと海東は心の中で思った。

「とにかく奴をアジトまでに追い込んだんだ。本番はこれからだ」

士が言葉を発し、全員が頷いて廃ビルを後にした。

バカラ

そこは200階に及ぶ超高層ビルで、内部はカジノとホテルからなる。

「うわー、かなりでかいビルだな」

ユウスケがその天にも届きそうなビルを見上げる。

「さあここからが本番だ。ボクと士はシユウザーに取り入る。そこで弱体化したところを全員で仕留める作戦だ」

タキシードに着替えた士と海東が作戦を確認していた。

「シユウザーにはヒューズが用意してくれたこの偽の機密情報を渡すんだな」

士が一枚の光ディスクを取りだす。そこにはヒューズの協力で作成されたIRPOの隊員情報などの偽物の機密データが入っていた。

「じゃあそろそろ行くか」

士と海東はビルの内部に入った。エレベーターで100階に降りると、そこは豪華なカジノが広がっていた。

「あれは、ブラッククロスの戦闘員？あの入口が怪しいな」

士はブラッククロスの戦闘員が入っていた入口を見つけた。戦闘員と同様に二人も入口に入る。そこには別のエレベーターがあった。

「これがブラッククロスのアジトにつながるエレベーターか」

士と海東はエレベーターに乗り、最上階へとたどり着いた。そこには四天王の一人、シユウザーがいた。

「何の用だ？」

「おれたちもあんたらの組織に加わりたい」

二人は言葉を発するなりシユウザーに近づいていく。

「ほう、我々の組織に加わると言うのか。なら相応の誠意はあるんだろうな？」

「おれはIRPOに嫌気がさしてここに来た。こいつはIRPOの機密データが入ったディスクだ。これをあんたにくれてやる」

土は光ディスクをシュウザーに投げ渡す。

「IRPOの機密データか、面白い……よかるっ」

シュウザーはあっさりと承諾した。それを見て作戦の第一段階は成功したと土と海東は確信した。

一方、ユウスケたちはバカラのカジノにいた。

「ここがカジノか、すごく賑わってるな」

「本当、そうですね」

ユウスケと夏海はあたりを見回し、その盛り上がりぶりに感心していた。そこにレッドがバニーガールの恰好をした女性に気付く。

「エミリア、エミリアじゃねえか！」

レッドはバニーガール姿のエミリアに近づいて行った。

「なんであんたがこんなところに？」

「私もレンの復讐をするため、シュウザーがこのビルに潜んでるって情報を得て潜入してるのよ」

エミリアは夫であるレンをシュウザーに殺されていた。そのため彼女もレッド同様レンを殺したシュウザーへの復讐をしようとしていた。

「おれたちもシュウザーをブチのめすためにここに来てるんだ」
「それなら話が早いわ、一緒にシュウザーを倒しましょう」

そこでエミリアの素性を知らないアセルスが口をはさむ。

「ねえレッド、この人誰？」

「彼女はエミリアと言って、つい最近おれの親友レンと結婚したんだ。でもレンは殺され、エミリアもおれと同様にシュウザーを倒したいと思ってるんだ」

「ユウスケに夏海にアセルスって言うのね。よろしくね、みんな！」

エミリアはレッド以外の面々を見渡すと、軽くウインクした。

シュウザーの部下に収まった士と海東は次の作戦を実行していた。

「さて、次は部下の一人を裏切り者に仕立て上げるところだね」

「それならあいつが適任じゃないか？」

士は、一つ目の怪人を指差していた。

「あれは、サイクロプスって怪人だね。あれなら良さそうだ」

決まるやいなや、二人はシュウザーの元へと動いた。まずは士が状況を説明し始める。

「シュウザー、ひとつ言いたいことがある」

「何だ」

「実はサイクロプスって奴が情報を横流ししてな、どうやら裏切る

つもりらしいんだ」

そこに海東もフォローを入れた。

「彼は裏でIRPOとつながってるらしいよ。言うならばIRPOを利用して、四天王の座を手に入れようとしてるんだ」

「ほう、それは貴重な情報だな。下がっていいぞ」

土と海東はシュウザーの部屋から退室した。その後、シュウザーの命令でサイクロプスは召喚され、尋問された。

「サイクロプス！ 貴様IRPOに情報を横流しして、おれの座を奪おうとしてるらしいな」

「だ、誰がそんなことを！」

サイクロプスは身に覚えのないことに、冤罪であることを悟り、それを証明しようとした。

「冤罪だ！信じてください！！ おれは何も……」

「もう何も言つな。貴様をここで処刑する」

シュウザーはアームレストにあるスイッチを押すと、サイクロプスの立っている床が開き彼を下階へと落とした。

そこにおぞましい形相のモンスターの群れが現れ、一気にサイクロプスを襲った。

下の階からサイクロプスの悲鳴が聞こえ、肉を喰いちぎるモンスターの音が聞こえる。それもシュウザーが再びスイッチを押した事により落とし穴は閉まり聞こえなくなった。

「土と海東を呼べ」

続いてシュウザーは土と海東を呼び出し、二人を右腕に採り立てるとの辞令を下した。

「これで第二段階も成功だね」

「このままうまくいけばいいんだが」

だが、土と海東を影から戦闘員の一人が見ていた。彼はひそかに彼らの策略に気付いており、今度は戦闘員がシュウザーに申告した。

「何だと？サイクロプスはやはり冤罪だったと？」

「キー（おそらくあの二人の策略だと思います）」

「わかった。奴らを呼び出せ」

こうして土と海東は、再度のシュウザーの部屋へと呼び出された。

「土、海東、裏切り者の申告、よくしてくれた」

だが、この時のシュウザーの口調は穏やかではなかった。

「しかし、確かにお前たちを右腕にしたのだが……やはりお前たちは危険だ。どうやら先ほどののは冤罪だったらしくてな」

（くっ！もう気付かれたのか！？）

土も海東も同様のことを心の中で言葉を発していた。

「お前たちにはここで死んでもらう。悪く思っな」

シュウザーはすぐさまアームレストのスイッチを押し、土と海東

をモンスターのいる部屋へと落としたりした。

「おれ様はこれからヘリポートへ向かう。もうこの場所も悟られた以上長居はできない」

シュウザーはそう言うと、地下の駐車場へと向かっていった。その一方で士と海東の周りにはモンスターが包囲していた。

「サイクロプスは何もできずに喰われたが」

「ボクたちにはライダーの力がある！」

士はディケイドライダー、海東はディエンドライダーをそれぞれ取り出し、カードをセットした。

「変身！！」

【KAMEN RIDE DECADE】

【KAMEN RIDE DIEND】

二人は同時にディケイドとディエンドに変身する。続けざまにディエンドはファイズとブレイドのカードを取り出し、ディエンドライダーにセットした。

【KAMEN RIDE FAIZ BLADE】

仮面ライダーファイズとブレイドが召喚され、間髪いれずディケイドとディエンドはファイナルフォームライドの効果を発動する。

【FINAL FORM RIDE Fa・Fa・Fa・FAIZ】

【FINAL FORM RIDE BU・BU・BU・BLAD】

【E】

ファイズはファイズブラスターに、ブレイドはブレイドブレードへとそれぞれ変形し、二人の手元へと届く。

「行くよ、士」

「おれに指図するな」

【FINAL ATTACK RIDE Fa・Fa・Fa・FA
IZ】

【FINAL ATTACK RIDE Bu・Bu・Bu・BL
ADE】

二人はファイナルアタックライドのカードによりライダーが変形した武器による必殺技を発動する。モンスターたちはその威力に耐えきれず、一人残らず一掃された。

「このままではシュウザーに逃げられる、急いで追おう」

ディケイドとディエンドはシャッターが開いたままの天井に向かってジャンプし、急いでシュウザーの行方を追った。

外に出たユウスケたちとエミリアの5人は、駐車場から出ていく1台のリムジンを見かけた。そこには明らかにシュウザーの姿があった。

「シュウザー！ あいつ逃げる気だ！」

レッドがシュウザーを指差す。

「シユウザー……レンの仇、逃がすもんですか！」

エミリアは拳銃を構え、シユウザーのリムジン目がけて発砲する。だが車体に命中しただけで車の動きを止めることはできなかった。

「急ごう、みんな！」

ユウスケたちはバイクに乗り、そのままシユウザーの行方を追う。リムジンはスピードを上げ、車の群れを蛇行するように追いこしていく。ユウスケたちも同様に前方の車を追い抜く。それはさながら映画で見るようなカーチェイスであった。

だが、シユウザーのリムジンの前方には大型トレーラーによる封鎖がされていた。トレーラーにはIRPOのロゴがあった。

「へへっ、シユウザー。お前も年貢の納め時だぜ」

ヒューズは腕を組んでシユウザーを待ち構えていた。それを見たシユウザーはさすがに危険だと感じ、車を停車させる。続いてユウスケたちも追い付き、バイクから降りた。

「レッド、しつこい奴め！」

レッドの姿を見て、シユウザーはつぶやく。執拗に追いかけるレッドに彼も内心でうんざりしていた。

彼の言葉に続くかのように、レッド、アセルス、エミリアの3人が言葉を発する。

「シユウザー、もうお前に逃げ場はない！レンと家族の仇、覚悟しろ……」

「今のわたしには妖魔の力なんてない。でもあなたは邪悪な存在、逃げるわけにはいかない」

「レンは私の夫だった。だからあんなだけは許さない、絶対！」

レッドは生身で拳を握り、身構える。アセルスとエミリアもそれぞれ剣、銃を構える。だがシュウザーはニヤリと笑い、レッドたちを見渡した。

「とっておきの切り札を見せてやる。出でよ、怪人ども！」

シュウザーの叫びに応じて、オーロラが発生し2体の怪人が現れる。龍騎の世界の怪人・ギガゼールとブレイドの世界の怪人・カプリコーンアンデッドである。

「まさか、ライダー世界の怪人!？」

シュウザーがライダー怪人を召喚したことに夏海は驚いた。ここでもライダー怪人が出現したことにただならぬ予感を感じていた。

「ライダー怪人ならおれが引き受けるぜ、変身！」

ユウスケは変身ポーズをとりクウガへと変身する。こうして闘いは始まった。クウガは2体のライダー怪人と闘い、レッド、アセルス、エミリア、さらにヒューズを加えた4人はシュウザーに挑む。

「超変身！」

クウガはドラゴンフォームに変え、近くの棒を拾ってドラゴンロッドに変換する。その素早い動きで的確にドラゴンロッドを叩きこみ、クウガは2体の怪人を相手に渡り合う。一方のレッドたちも次

々にシュウザーに攻撃を加えていく。アセルスは神速三段突きを放ち、エミリアが跳弾で追撃する。シュウザーが腕を振り回して間合いを開けると、今度はヒューズが気の槍を放つ。この世界の術法”心術”の一つ『生命波動』である。

「おのれ！雑魚どもの分際で！！」

「喰らいやがれ、シュウザー！ 金剛神掌！！」

レッドは拳に気を溜め、シュウザーをそのまま拳で突く。同時に拳の気を爆発させる。

「ぐぐっ！！！！」

シュウザーは思わず後ずさりする。だがこの時シュウザーはあることに気づいていた。

「レッド、なぜアルカイザーに変身しない」

シュウザーの言葉にレッドは何も言えなかった。その様子を見たシュウザーはさらに話を続ける。

「そうか、ヒーローの力を失ったのか。残念だったな」

すると、シュウザーは青く光る立方体状のパーツを取り出し、胸部の蓋を開いてパーツを交換する。

「これはキューブだ。こいつの力によりおれはパワーアップする！」

シュウザーは言うと同時に機械の腕をレッドに向けた。

「アルカイザーに変身できないお前など敵ではない。キューブによりパワーアップしたおれの力に絶望するがいい！スーパークロービット……！」

シューザーは機械の腕を切り離すと生身のレッドにむけて強化されたクロービットを発射した。

「ぐあああっ……！」

さらにスピードが上昇したクロービットはレッドの身体を容赦なく切り刻む。

「レッド……！」

アセルスが助けようとするも彼女もクロービットの攻撃に巻き込まれる。八つ裂きにされ、昏倒するアセルス。さらにクロービットは目にもとまらぬ速さでエミリアとヒューズを襲う。その攻撃に二人はなす術もなかった。

「レッド！ アセルス……！」

クウガがレッドの苦戦に気付き、駆けつけようとするも2体の怪人が行く手を阻む。

「く………そっ………！」

深手を追いながらも、なお立ち上がろうとするレッド。

「所詮お前の力などヒーローあつてのもの。生身の貴様なんぞ恐れるに足りん」

「ふざ……けるなっ!!」

レッドは残った力を振り絞ってシュウザーの周りを三角状に回る。レッドは無意識に三方向からシュウザーを渾身の力で蹴りあげた。蹴りあげると同時に脚部から気がうねり上がり、龍の姿を象った。

「あれは……まるで3匹の龍がからみついているみたいだ!」

ヒューズがレッドの攻撃を見て叫ぶ。気が象る3匹の龍は空高く舞い上がり消えていった。

「な、何故だ! お前のどこにそんな力が……!!」

「見たか、おれの新技『三龍旋』!! 例えアルカイザーに変身できなくても、貴様をブツ潰す!ただそれだけだ……!!」

レッドが息を切らしながらも身構える。そのレッドの不屈の意志に、シュウザーはうろたえていた。

ふと、遠くから2台のバイクの音が聞こえてきた。それらのバイクが止まると、バイク乗りがヘルメットをそれぞれ脱ぐ、その正体は門矢士と海東大樹であった。

「その通りだ。レッドはヒーローの力に驕るような奴じゃない」

「門矢士! 貴様、生きてたのか!!」

士はそのままレッドの隣へと歩いていく。

「例えヒーローの力がなくても、勝ち目がゼロに近くても、それでも悪に立ち向かうために己の力を鍛える……それが真のヒーローだ。今こいつは両親や、親友の仇を討つために地位をなげうってお前に挑んでいるんだ!」

「そつだ……おれはいつもヒーローの力に頼ったことはない。常に生身の状態で技を磨き、敵を倒す技を編み出して強くなつていったんだ」

レッドは土に同調する。さらに土の論調は強さを増していく。

「いくらヒーローの力が強くても、それに頼りきりな奴はただの自惚れだ。でもこいつは違う！ヒーローでなくても、常に強さを求めて自らを鍛える！そう、こいつはこの世界の誰よりも強い、本当のヒーローなんだ！！」

シユウザーはいきり立った。その怒声で、土を問いかける。

「貴様、一体何者だ！」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ」

土がいつもの名乗りを上げると同時に、上方からレッドを呼ぶ声が聞こえた。レッドが声のする方向を見上げると、トレーラーの上にアルカールの姿があった。

「アルカール！？」

「受け取れ！」

アルカールは手に持った物体をレッドに投げ渡す。レッドはそれをキャッチして見てみると、それはアルカイザー変身用の腕時計だった。

「シユウザーを倒せるのはお前しかいない。頼んだぞ、アルカイザー」

アルカールが言うと、レッドは承知したような表情で腕時計を巻

いた。

「わかったよ、アルカール！」

「じゃあ行くぞ、レッド」

士はレッドに声をかけると、ライドブッカーからディケイドのカードを取りだした。

「変身！！」

【KAMEN RIDE DECADE】

二人は同時に掛け声を出し、士はディケイドに、レッドはアルカイザーに変身した。

「さあてシュウザー、こっからが本番だぜ！」

アルカイザーとディケイドは同時にシュウザーに向かって走り出す。

「喰らえ、スーパークロービット！！」

シュウザーは再びスーパークロービットを二人目がけて飛ばす。ディケイドはライドブッカー・ソードモード、アルカイザーはレイブレードを起動し、クロービットをはたき落した。

「これならどうだ！ グライダースパイク！！」

シュウザーは高く飛び上がり、上空から接続した機械の腕を突き出す。だがこれも見切られ二人に剣で迎撃される。

「ぐわああっ!!」

シュウザーは地面に叩きつけられる。一方の2体の怪人たちも、デイエンドに変身した海東の加勢で形勢逆転していた。

「それじゃあ行くよ、小野寺君」

「ああ!」

【FINAL ATTACK RIDE Di・Di・Di・DI
END】

デイエンドはデイメンションシユートをカプリコーンアンデッドに、クウガはマイティキックをギガゼールに放つ。二つの必殺技は同時に命中し、双方の怪人を絶命させた。

デイケイド、アルカイザーとシュウザーの闘いも二人の優勢になっていた。デイケイドのデイケイドブラスト、アルカイザーのアル・ブラスターの同時攻撃にシュウザーのダメージはみるみる蓄積していく。

「アルカイザー、とどめを刺すぞ」

「おう!」

デイケイドはファイナルアタックライドのカードを取り出し、アルカイザーも必殺技を繰り出そうと構える。

【FINAL ATTACK RIDE De・De・De・DE
CADE】

二人の必殺技、デイメンションキックとアル・フェニックスが同

時に放たれ、シュウザーに同時に命中した。

「ぐがああっ!!!」

シュウザーは攻撃に耐えきれず、爆発四散した。その爆風に吹き飛んだキューブを、ディエンドはジャンプして手に取る。

「これはボクの求めていたお宝だ!」

海東はこの世界での宝物を手に入れた喜びを、一方のレッドも仇を討った喜びを同時に感じていた。

「父さん、母さん、レン、仇はとったぞ!」

だが、そこに突如鳴滝が現れる。隣にはアルカイザーに似たロボットがいた。

「鳴滝!」

「ディケイド!これは私がメタルブラックにアルカイザーのデータを取り入れて改造したメタルアルカイザーだ!このメタルアルカイザーでお前を倒してやる!!!」

鳴滝は再びオーロラに姿を消す。残されたメタルアルカイザーは言葉を発したが、たどたどしかった。

「ディケイド……セカイノハカイシャ……クロス」

「一体どうしたんだ、おれが闘った時はまともだったぞ」

「おそらく、改造した結果でしょう」

ユウスケは一瞬疑問に感じたが、夏海は鳴滝の改造によりおかし

くなっているとの解釈をユウスケに伝えた。

すると、メタルアルカイザーはその場にいた全員に無差別に攻撃する。キューブを組み込んだシユウザーをも上回る力でディケイドたちを吹き飛ばしていく。

「ダークフェニックス!!」

さらにメタルアルカイザーはアルカイザーのアル・フェニックスに似た技を乱発する。そのパワーに手も足も出ず、アルカイザーでも耐えるのが精いっぱいだった。

「オレハ……サイキョウノヒーローダ! オレノスペックノマエニオマエラノチカラナドツウヨウシナイ!!」

「どうやらわかってない奴が現れたらしいな」

【KUUGA AGITO RYUKI FAIZ BLADE
HIBIKI KABUTO DEN-O KIVA - FIN
AL KAMEN RIDE DECADE】

ディケイドは立ち上がると、ケータッチのパネルをタッチしてコンプリートフォームに姿を変える。それを見たメタルアルカイザーは再びダークフェニックスをディケイド目掛けて放つが、ディケイドは龍騎サバイブを召喚し、ファイナルアタックライドを発動した。

【FINAL ATTACK RIDE Ryu・Ryu・Ryu・
RYUKI】

ディケイドと龍騎サバイブは同時に炎の刃「バーニングセイバー」を放つ。その攻撃をメタルアルカイザーはまともに受け、ダークフェニックスは不発に終わる。さらにディケイドはアタックライドの

カードを取りだす。そのカードの効果は、仲間たちが連続して技を出して大ダメージを与えるものであった。

「みんな、行くぞ!!!」

【ATTACK RIDE RENKEI】

アタックライドが発動すると同時に、まずはヒューズが飛び上がり空中で身体を高速で回転させて攻撃する技『スカイツイスター』をメタルアルカイザーに放つ。その勢いは大きな竜巻を生み出し、メタルアルカイザーの身体は宙に舞い上がる。続いてアセルスがメタルアルカイザーの上に飛び上がり、剣を突き刺して地面に叩きつけ、さらに飛び上がり上から突きを繰り出す技『ロザリオインペール』を放つ。その素早い動きはあたかも5人に分身したように見え、上から見ると十字を描いているように見える。間髪いれず、エミリアが5発の弾丸を十字状に放つ技『十字砲火』を繰り出す。ここまでの三連続の攻撃に悶えるメタルアルカイザー。

【FAIZ - KAMEN RIDE BLASTER】

エミリアが攻撃している最中に、ディケイドはケータッチのファイズのシンボルをタッチし、ファイズ・ブラスターフォームを召喚する。続けさまにファイナルアタックライドのカードを右脇のディケイドライバーに挿入する。

【FINAL ATTACK RIDE Fa・Fa・Fa・FAIZ】

ディケイドとファイズ・ブラスターフォームはメタルアルカイザー目掛けて『フォトンバスター』を放つ。2本のビームに包まれ、

四肢の機能が故障し始めていく。

「アルカイザー、後はお前が決める」

デイケイドの言葉に、アルカイザーは飛び上がり身体にエネルギーを纏う。そのエネルギーは不死鳥を象り、そのままメタルアルカイザーに突撃する。

「真アル・フェニックス!!!!」

すさまじいまでの不死鳥を象ったエネルギーのうねりに包まれて、メタルアルカイザーはそのまま爆発四散した。

【SKY ROSARIO JUJUI PHOTON PHOENIX!】

デイケイドドライバーの電子音声が、5人の連携技を叫ぶ。センスのないネーミングだな、とデイケイドは心の中で思った。

メタルアルカイザーの残骸の前に着地したアルカイザーは、残骸を見ると静かに独白した。

「メタルアルカイザー、お前は強かったよ。しかし、間違った強さだった……」

メタルアルカイザーを倒したレッドはアルカールの元へ駆け寄った。

「アルカール、おれのためにアルカイザーの変身ツールを持ち出すなんて……」

「いいんだ、アルカイザー。奴らに対抗するにはお前が必要だ。私

は出来ることをしただけだ」

レッドは不安だった。彼の取った行動が明らかにサントアリオに背く行為だったからである。

「でも、それじゃアルカールは……」

「私はこれでヒーローを引退だ。もうお前に会うことはないだろう……でも、これからのこの世界の平和はお前が守らなければならぬ、それがお前にアルカイザーの変身ツールを託した、もうひとつの意味だ」

アルカールはレッドに別れを告げ、素早く飛び去って行った。レッドはアルカイザーの変身ツールを握りしめ、ただアルカールがいた空間を見つめていた。

「レッド……」

士はレッドに声をかける。レッドは声に応じて振り返った。

「士、おれは仇を討つことができた。でもブラッククロスがある限りおれの闘いは終わらない。そう、これからもおれは闘い続けるんだ……世界が真の平和を取り戻すまではな」

そこにアセルスがレッドに寄り添う。

「わたしも一緒に闘う。ようやく人間に戻れて、元の生活に戻れるけど……やっぱり

レッド君のことを放っておけないから」

「私も協力するわ。結局はレッドの世話になったし、借りはちゃんと返しておかないとね」

「おれもだ、何たっておれとレッドは腐れ縁だからな」

エミリア、ヒューズの2人も同調する。それを見て、土とユウスケ、夏海の3人は安心する。彼らがいる限り、この世界は大丈夫だろうと。

「土、この世界はおれたちに任せろ。そしていつかまた会おう、ブラッククロスを倒して平和を取り戻したこの世界でな」

「ああ、約束だ」

土とレッドはお互い握手した。その傍らで、海東はキューブの蓋を外していた。

「これは、指輪か。たしか古代文明の遺産とか言ってたな」

海東は、手に入れた宝を見せつけるために土たちに声をかける。

「みんな、見たまえ。シユウザーが所持していたキューブ、その力の源はこの指輪だ」

海東は右手の指でつまんだ指輪を見せびらかした。

「それは、全て集めると願いをかなえられると言われている指輪。確かファシナトールにいたときに聞いたことがある」

アセルスが海東の指輪に視線を向ける。

「だがこれはボクが持った以上、ボクのお宝コレクションになるんだ。そのことは承知しておきたまえ」

海東は言つや否や、踵を返しそのまま去つて行つた。その後ろ姿を、土は複雑な表情でただ見つめていた。

光写真館にて、夏海の祖父・栄次郎は土の撮つた写真を見ていた。

「これは、いい写真だねえ。かつこいいヒーローが二人も映ってるじゃないか」

その写真は、お互い握手するアルカイザーとアルカールの姿が映つていた。

「でもアルカールはヒーローをやめ、この世界から消えてしまった。けどアルカイザーと仲間たちがいる限り、ここは大丈夫だろう」

土が写真を見つめる栄次郎に説明する。そこにキバーラが嬉しそうな表情で現れる。

「土くん！ 栄ちゃん！ そろそろ『R3X』が始まるわよお〜！」

「なんだ、R3Xって」

「この世界で人気の特撮ヒーロー番組よお！ 見たい見たい！」

キバーラは興奮してあたりを飛び回る。その番組にユウスケが興味を示す。

「おれも見てみたいなあ。ひよつとして、クウガみたいなヒーローが世界中の人々の笑顔を守るために闘う番組だったりして」

「意外にも13人のヒーローのバトルロイヤルとか、ヒーロー番組

の皮を被った料理番組とか、またはヒーローそっちのけで昼メロする番組かもしれませんよ」

夏海がさりげなくユウスケに突っ込む。

「よし、それじゃあみんなで見よう!」

栄次郎は立ち上がり、テレビに向かおうとするが、また何かに躓いてしまう。

「うわわっ!」

栄次郎は背景ロールの隣の柱にぶつかり、同時に紐を引く。すると新しい背景ロールが降り、別の世界を表す絵が現れた。

こうして、彼らはまた別の世界へと旅立っていく。次の世界で何が待ち受けているかは、この時の彼らにはまだ知る由もない。

< 終わり >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9221r/>

仮面ライダーディケイド NOVEL大戦SHORT ~ ALKAISER SAGA ~

2011年11月15日19時51分発行